

## 教職志望学生が危機管理意識の国際的な相違を 認識することの有効性に関する考察

－「学校安全」における留学生と日本人学生の学びの比較から－

### A study on the effectiveness of recognizing international differences of crisis management consciousness by students who wish to be teachers.

－From a comparison of the studies of international students  
and Japanese students in “school safety”－

松井 典夫

Norio MATSUI

#### 要旨 (Abstract)

本研究では、北海道地震における訪日外国人が直面した課題がこれからの時代において看過できないものであり、また、昨今の学校教育における外国籍児童生徒の増加に伴い、これから教職を志す学生が「何を学ぶのか」という視点に立ったとき、諸外国の危機管理意識やその方法について学ぶことの必要性について考察した。そこで本研究では、教職志望学生が日本以外の国の危機管理について知ることは、教員の重要な資質能力の一面を形成すると仮定した上で、「学校安全」の授業における中国人留学生と日本人学生の学びについて比較検討した。そこで、学生が発表の際に記述した自由記述感想文をテキストデータとして使用し、テキストマイニングによって分析を行った。

両者の学修を比較したとき、危機管理において「命」というものに最大の重きを置き、「人の命も大切であり、できれば救いたい」という感覚においても中国人留学生と日本人学生は同様の質を示すことが示唆された。しかし、授業の中でもよく見られたこととして、中国人留学生の思考としては、道徳的な感情だけで「命」や危機管理について語る事はなく、そこには知識や技能などの基盤が重要であるという発想があった。そのような中国人留学生の発言、発想は日本人学生にとって、大きな刺激となることが示唆された。

キーワード： 教職志望学生 危機管理意識 グローバリズム 学校安全 テキストマイニング

#### 1. 研究の背景と目的

##### 1-1. 特別支援の視点と危機管理

2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震（以下、北海道地震）では、管内のほぼ全域で電力供給が止まるブラックアウトの被害や、厚真町を中心とした広域で発生し、多くの被害を出した土砂災害に加えて、昨今のインバウンド景気と呼ばれる訪日外国人旅行者への影響において、次のような災害時の一つの課題を表出させた。災害時に重要となり、被災者の不安を取り除き、行動の意思決定を行う際に必要なものとして、「情報」が挙げられる。

北海道地震当時、訪日外国人はSNSを活用して情報を収集したが、停電の影響でそれもままならず、やはり「人的支援（情報）」が有効であった。ただそこで、言語の問題が壁となった。日本では諸外国と比して、情報ボード（看板、掲示、標識等）の表示が多様な人種に対応していない場合が多い。それが要因ともなり、災害時に避難所へ向かうにも混乱したという事例が多く報告された。これは、危機管理におけるグローバルな視点の欠如をもの語り、各所で対応を進めていく必要がある。

また、訪日外国人と同様に、災害時において特別な支援が必要とされるのは高齢者や障害者である。東日本大震災では高齢者や障害者の死亡率は住民全体の2倍を数えたという報告もある。昨今、来たる南海トラフへの対応が各所で進められ、国民の危機管理意識は高まってきている感がある。しかし、現在のわが国における社会的背景から、災害においてもグローバルな視点、あるいは特別支援の視点を持つことの必要性は増していることを認識していくことが重要である。

### 1-2. グローバリズムと学校教育

前述したように、現在の日本はその社会的背景から、あらゆる場面でグローバルな視点を強化していく必要がある。それを学校教育の中で考えてみたい。

まず、外国籍児童生徒の公立義務教育諸学校への受け入れは、各法律等で保障されていることを確認しておきたい<sup>1)</sup>。その上で現在のわが国における外国人児童生徒を取り巻く状況について概観しておく。

「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」（文部科学省）の結果において、「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数」は34335人であり、前回調査より17.6%増加している。そのうち、小学校で3272人（17.3%）、中学校で983人（12.6%）、高等学校で643人（28.3%）が増加している。また、日本語指導が必要な外国籍児童の母国語別在籍状況を見ると、ポルトガル語を母語とする者が25.6%で最も多く、次いで中国語が23.9%、フィリピン語が18.3%、スペイン語が10.5%で、これら4語で全体の78.2%を占める。中でも中国語については1794人（28.0%）の増加という調査結果が出ている。

このことを別の視点で見たとき、平成28年度調査（学校教育総括）において、全国の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の合計は37190校を数える。そして、日本語指導が必要な外国籍児童生徒が1人～100人以上在籍する学校数は7020校であり、18.9%を占める。このことは、現在教職を目指す学生が将来教員になったとき、外国籍児童生徒に出会う可能性の高さを示すものであり、そのことを認識した高等教育を推進する必要性を示唆するものである。

### 1-3. 今後の高等教育のグランドデザインと留学生の関連

教育現場においては、平成29年告示の新学習指導要領における対応が推進されているところだが、すでに高等教育においては、2040年を見据えたグランドデザインが提案されている。2040年は、平成30年（2018年）に生まれた子供たちが大学の学部段階を卒業する年である。また、現在教職を目指す学生が、多くは40歳代のベテラン教員になっている年でもある。2040年には18歳人口が88万人に減少し、現在の7割程度となると推計されている。その上で、高等教育機関への「社会人及び留学生の受け入れの拡大」が図られるよう提言されている。その背景として、「グローバリズムは新しい形の相互依存を創出しており、人間の行動は、個人の属する地域や国をはるかに越え、

<sup>1)</sup> 「日本国憲法 第26条」

「教育基本法（義務教育）」

「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約（A規約）第13条」

「児童の権利に関する条約 第28条」

例えば経済競争や環境問題に左右されることがある」とされ、高等教育機関においては多様性を受け入れ、取り入れることができる柔軟なガバナンスが肝要であると言えよう。

#### 1-4. 国際的な危機管理意識の相違への着目

本研究では、先に述べた北海道地震における訪日外国人が直面した課題がこれからの時代において看過できない課題であり、また、昨今の学校教育における外国籍児童生徒の増加に伴い、これから教職を志す学生が「何を学ぶのか」という視点に立ったとき、諸外国の危機管理意識やその方法について学ぶことの必要性について考察する。

たとえば台湾の屏東県立地磨兒國小徳文分校での聞き取り（松井・岡村2018）では、地震発生時の児童や教員の避難方法として、机の上に座布団や枕等を乗せて、直ちに運動場に避難するということである。以前は机の下に身を隠すという指導もしたが、その危険性が提言され、台湾政府の方針でそのようになったということである。これは、日本の避難方法とは違う。現在は「机の下に身を隠す」という文言ではなく、「落ちてこない、倒れてこない、移動して来ない場所」に身を隠すという文言に変えられているが、いずれにしても屋外等への避難行動はその後という指導が一般的である。

このことは一例であるが、諸外国の危機管理意識やその方法の、日本との相違を認識することは、グローバル化の意識が必要となってくる学校教育において重要な視点であると言えよう。またそのことは、学校教育現場でこれから教育に携わる教職志望学生にとって、「何を学ぶのか」という視点の中に重要な位置を占めると考える。

そこで本研究では、教職志望学生が日本以外の国の危機管理について知ることは、教員の重要な資質能力の一面を形成すると仮定した上で、「学校安全」の授業における中国人留学生と日本人学生の学びについて比較検討する。そのことによって、日本人学生が「何を学んだのか」について考察し、グローバルな環境での学修の有効性や危機管理意識の深化、拡充の有効性について考察することを目的とする。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 本研究のモデル

本研究は、N大学における授業「学校と安全」をモデルとした。当授業は1冊の学校安全・安全教育に関する書籍をテキスト<sup>2)</sup>として、購読、まとめの発表、ディスカッション、という流れで展開されている。また、当授業には42名の学生が受講しており、その内訳は教育学部の日本人学生が14名、中国人留学生が28名となっている。したがって、当授業は平素から中国人留学生と日本人学生が交流する場面が用意されている。

### 2-2. 学生の自由記述感想文について

当授業「学校と安全」では、発表の日時をあらかじめ決めておき（学生の希望日）、それまでに発表箇所をテキストの中から決め、プレゼンテーションやレジюмеを作成して内容をまとめて発表する。その際に必ず問題提起を行い、ディスカッションする場面を入れることを条件とした。各回の発表後、出席した全学生がリフレクションを記述する。これは、自由記述感想文の形式を取り、字数等にも制約はない。

### 2-3. 発表の概要について

発表に扱われたテキストの概要等については以下に、（発表記号）（発表者）（発表タイトル）（テキストの概要）の順で示す。発表記号は本研究で考察する際の便宜上の記号である。発表者は日本人学生、中国人留学生という表

<sup>2)</sup> テキストに使用した書籍は拙著「どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか - 事件・事故・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」（ミネルヴァ書房）であり、研究方法に示すページ数やタイトルは、すべて本書によるものである。

記のみにとどめる。発表タイトルは発表学生がつけたものをそのまま表記する。テキストの概要は、発表学生が取り扱ったテキスト部分について、その概要を示す。

(H-1) 日本人学生「安全意識を高めるために」

テキストの「いかのおすしの落とし穴」(pp.88-96)に関する発表。本書では、岡山県の小学校で実践された「いかのおすし」という防犯標語を取り扱った安全教育の授業について、言葉を教えることで防犯意識の高まりや危機管理能力が高まったと思うことは、逆に子供達の不安全をまねく可能性について記述された部分である。

(H-2) 中国人留学生3名「道徳的な倫理観と安全な行動について」

テキストの「溺れかけた兄妹」(水難災害・小学校中学年対象)の部分(pp.127-132)を取り扱った発表。これは、短編小説を教材化した水難災害の授業を紹介した部分であり、主人公が溺れかけた妹を助けに行かず、自分の命を守ろうとした行動について、道徳性と安全な行動について子供達が議論する授業である。

(H-3) 中国人留学生3名「いじめについて」

テキストの「子どもたちにとっての本当の安全に向けてⅡ～いじめについて～」(pp.171-184)を取り扱った発表である。国立教育政策研究所の「いじめ追跡調査」の結果についての見解を示しながら、「Smile School」という授業実践について書かれた部分である。

(H-4) 中国人留学生2名「いのちの避難訓練(火災)の授業」

テキスト中の「いのちの避難訓練(火災)の授業・小学校中学年対象」の項を取り扱った発表。「おはしも」という避難訓練のセオリーについて取り扱った実践であり、火災時、大切なものを「取りに(助けに)戻るか、戻らないか」という場面について、議論する授業である。

(H-5) 日本人学生1名「釜石の奇跡に学ぶ」

「釜石の奇跡に学ぶ(地震災害)の授業・小学校高学年対象」(pp.139-149)を取り扱った内容。ここには、筆者が東日本大震災後の釜石市に赴き、取材した成果を授業にして実践した内容が書かれている。

(H-6) 中国人留学生3名「阪神・淡路大震災の教訓から」

テキスト中の「阪神・淡路大震災の教訓から(地震災害)の授業・小学校高学年対象」(pp.132-139)の部分を取り扱った発表である。この授業は、阪神・淡路大震災時の1枚の画像と、6434人という被災によって命を失った人の数について取り上げ、震災と命について考える授業である。

(H-7) 日本人学生1名「学級崩壊の実態」

これはテキスト中の「子どもたちにとっての本当の学校安全に向けてⅠ～学級崩壊について～」(pp.165-170)を取り扱った発表である。ここには、学級崩壊に至る実例を挙げながら学級崩壊の要因について見解が示されている。

(H-8) 日本人学生1名「IDカードの重要性」

これは、本書「IDカードの教訓」(pp.71-76)を取り扱った発表である。本書には、2001年に発生した大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件を取り上げ、IDカードによって守られる学校安全の可能性について書かれている。

(H-9) 日本人学生1名「いのちを守る教師になるには」

これは、本書中「附属池田小学校の不審者対応訓練」(pp.7-9)と「附属池田小学校への訪問 - いのちを守る教師になるために -」(pp.185-191)の二箇所を取り扱った発表である。どちらの項についても、事件のあった学校における再発防止に取り組む姿勢と、学校や子どもを守るための取り組みについて書かれている。

(H-10) 中国人留学生2名「いのちのバイスタンダー」

本書中の「いのちのバイスタンダー(生命尊重)の授業・小学校高学年対象」(pp.115-126)を取り扱った発表

である。この項では、AEDや一次救命処置を取り扱ったBLS (Basic Life Support) 教育を題材とした、いのちの大切さの実感を持たせようとするねらいの授業実践について書かれている。

(H-11) 中国人留学生2名「教師殺傷事件から」

この発表は「寝屋川市立中央小学校事件」(pp.47-59)の項についてのものである。ここでは、2005年に発生した寝屋川市立中央小学校で、卒業生に教師が殺傷された事件について書かれ、その教訓を発信することの重要性について書かれている。

(H-12) 中国人留学生3名「本当の安全・安心に欠かせないもの」

これは、発表(H-7)と同様の部分を取り扱われた発表であり、テキスト中の「子どもたちにとっての本当の学校安全に向けてI～学級崩壊について～」(pp.165-170)の部分の発表である。ここには、学級崩壊に至る実例を挙げながら学級崩壊の要因について見解が示されている。

本研究では、これら学生の発表の際に記述した自由記述感想文をテキストデータとして使用し、テキストマイニングによって分析を行った。テキストマイニングは、大量のテキストデータから有益な情報を取りだし、キーワードの出現頻度や関係性を分析する方法である。本研究ではこの方法によって、中国人留学生と日本人学生の「学び」を分析し、比較検討した。

3. 結果

本研究結果については、テキストマイニングにおける結果をワードクラウドで可視化することによって、日本人学生と中国人留学生の学びを比較できるようにした。ワードクラウドは、文章の中で有意味スコアの高い単語を複数抽出し、そのスコアの高さを文字の大きさで表している。

なお、以下に示す結果としては、学生の自由記述において複数の授業が関連した記述(例えば同授業で発表された内容を混在して記述するなど)については分析することが困難だったため、H-6、H-8、H-9については分析の対象としなかった。

3-1. (H-2) 中国人留学生3名「道徳的な倫理観と安全な行動について」の結果

どちらも中心に「命」という名詞が最大スコアを示した。H-2のテーマは「溺れかけた兄妹」という短編小説を題材にした水難災害に関する内容の発表だったため、中国人留学生においては「助ける」「溺れる」、日本人学生においては「助ける」というワードが上位に位置した。中国人留学生に飲み、「安全教育」というワードが出現している。

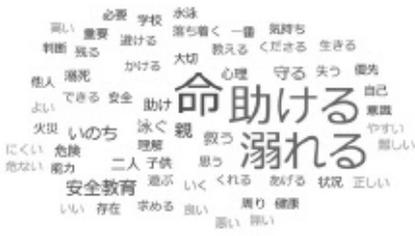


図1 H-2 中国人留学生



図2 H-2 日本人学生

## 3-2. (H-3) 中国人留学生3名「いじめについて」の結果

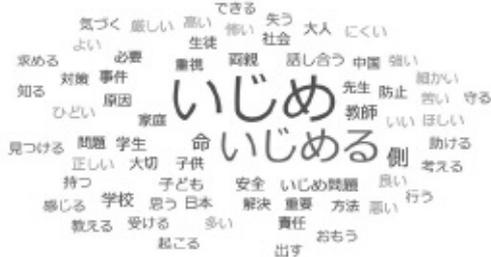


図3 H-3中国人留学生

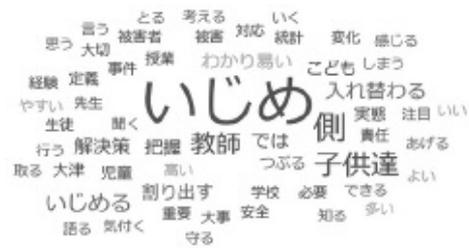


図4 H-3日本人学生

いじめをテーマにしたH-3においては、中国人留学生、日本人学生のどちらも「いじめ」というワードを中心に置き、次いで中国人留学生は「いじめめる（側）」、日本人学生は「側」「子供達」が上位に位置した。また、日本人学生は中国人留学生に比して「教師」というワードが高いスコアを示した。

## 3-3. (H-4) 中国人留学生2名「いのちの避難訓練（火災）の授業」の結果



図5 H-4中国人留学生

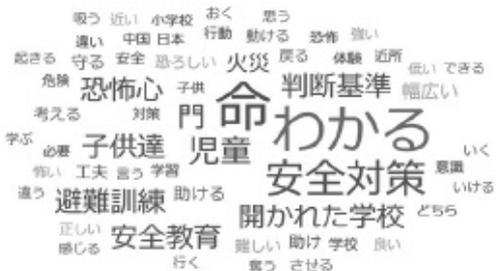


図6 H-4日本人学生

H-4は火災についての内容であったが、中国人留学生と日本人学生の自由記述に明確な違いが出ている。中国人留学生については「命」を中心に置き、「わかる」「戻る」が比較的高いスコアを示すワードではあるが、特徴的な結果を示すものではなかった。一方で日本人学生については、「命」を中心に置いたのは中国人留学生と同様であったが、「わかる」という動詞が「命」よりも高いスコアを示し、また、「安全対策」「児童」「子供達」「避難訓練」「安全教育」「恐怖心」「門」「開かれた学校」というワードが、いずれも同レベルで高いスコアを示している。

## 3-4. (H-5) 日本人学生1名「釜石の奇跡に学ぶ」の結果

H-5のテーマは東日本大震災における「釜石の奇跡」を取り扱ったものである。中国人留学生の自由記述については「防災訓練」（避難訓練と同義）がもっとも高いスコアで中心に置かれた。一方で日本人学生の自由記述では、「命」「子供達」が同スコアでもっとも大きな値を示した。

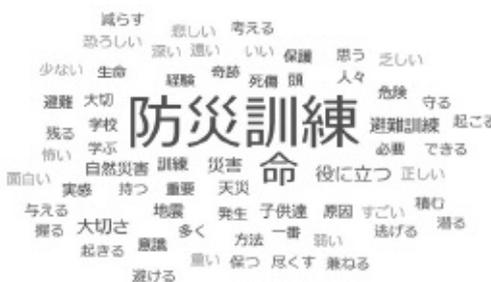


図7 H-5中国人留学生

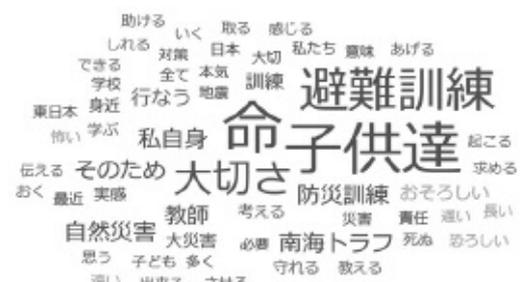


図8 H-5日本人学生



とは反対に、命について、現実的に自己の考えとして発言する中国人留学生の様相であった。

ワードクラウドにおいて特徴的な相違が生じたH-5について考察してみる。H-5は2011年に発生した東日本大震災における「釜石の奇跡」を題材として取り扱ったテキスト内容の発表であった。ワードクラウドにおいては、中国人留学生は「防災訓練」というワードが突出していた。一方で日本人学生については「子供達」というワードが最大であり、次いで「命」「避難訓練」「大切さ」というワードが突出していた。これらについて自由記述作文からその文脈を考察する。

中国人留学生の「防災訓練」については、次の文の中で使用された。「命が一番重要です。防災訓練を通じて、命の大切さの実感が認識できる。したがって、防災訓練は不可欠です」「防災訓練をすれば、みんなが災害に緊張せず、冷静に逃げられます。地震は非常に恐ろしい災害です」

このように、中国人留学生の「防災訓練」というワードにおける文脈には、一貫して「地震災害は予期せず発生するものであり、命は大切なものである。その命を守るには、いざという時に冷静に行動するためにも防災訓練が重要である」というものであった。その根底には、2008年に発生し、7万人にも及ぶ死者、行方不明者を出した大災害（四川大地震）の記憶が影響している。

一方で日本人学生の「子供達」「命」「避難訓練」「大切さ」というワードにおける文脈を自由記述から考察する。そこには、以下のような記述がみられた。

「東日本大災害の時もそうだったが子どもの命を守れないと学校の責任を求められる。学校はできる全ての対策を取らなければならない」「子どもたちにとって「死」が遠い存在であることは当たり前だと改めて学んだ。「命は大切だ」ということをしっかりと子どもたち自らが学べる環境づくりができる教師になりたい」「教師が子どもたちに自然災害のおそろしさを教えてあげなければならない。教師が本気にならないと子どもたちも本気にならない。と改めて感じた」

このように、地震災害と教職を志す自身を関連させて感想を記述する様相があり、そこに「子供達」というワードが意味を持って頻出したことが伺える。

#### 4-2. 日本人学生と中国人留学生の相違

ここで、中国人留学生と日本人学生のワードクラウドで大きな相違を見せたH-10をターゲットに、両者の相違について考察する。

H-10は「いのちのバイスタンダー」という題材を扱ったテキスト内容の発表である。「いのちのバイスタンダー」は、一次救命処置を学んだ児童が、「もし道に知らない人が倒れていたら、助けますか」という設定について、自分の立場を決定し、議論する授業である。

中国人留学生のワードクラウドでは「命」「助ける」というワードが上位に位置し、日本人学生については「わかる」「子供達」「AED」というワードが上位に位置した。それらのワードを自由記述の中から概観していく。

中国人留学生の「命」「助ける」というワードに関連する記述には、以下のキーセンテンスが見られた。

「他人を助けたいという気持ちはすべての前提で道徳的な考えである」「命の重さをはじめて認識してきた感動こそが自分を変える」「知らない人も助けるべきです」「BLS教育を勉強して、命の重さを認識して、人の命を救うことにもっと自信を持って、正しい方法で人の命を助ける」「人を助ける一歩を踏み出す勇気が極めて重要」「だれの命もとてもとても重要」「人を助けるのは私たちにとって、もちろんのこと、義務だと思う」「命が大切で、「助けるべきだ」という考えが先に来るのが一番大切」

一方で日本人学生の「わかる」「子供達」「AED」というワードに関連する記述には、以下のキーセンテンスが見

られた。

「子供たちに人命救助の方法を‘教師’が教えなくてはいけない」「子供たちが将来最善を尽くせるように教えてあげるのが、教師の役割なのではないか考える」「AED や心臓マッサージは指導と義務づけるべきだと思う」「知識や技術はもちろん重要だが、いざという時に人を助ける一歩を踏み出す勇気が極めて重要で命に関わっている」

以上の両者の比較から考察したとき、いずれも「命」というものに最大の重きを置き、「人の命も大切であり、できれば救いたい」という感覚においても同様の質を示したことが伺える。しかし、授業の中でもよく見られたこととして、中国人留学生の思考としては、道徳的な感情だけで「命」や危機管理について語る事はなく、そこには知識や技能などの基盤が重要であるという発想があった。そのような中国人留学生の発言、発想は日本人学生にとって、大きな刺激となっていたようである。

#### 4-3. おわりに

本研究の関心は、筆者が海外における危機管理意識の相違を実感したところに端を発している。台湾の屏東郊外にある小学校では、地震、洪水、連れ去り事案を想定した危機管理マニュアルが整備されていた。それは、日本において2001年に発生した大阪教育大学附属池田小学校における児童殺傷事件以降、文部科学省から通達を受けて全国の学校園で作成されている危機管理マニュアルと遜色ない、あるいははるかに整ったものであった。また前述したように、地震発生時の避難方法についても、「第一に建物から離れる」ということが徹底されている。これは、台湾当局の指示であるという事である。日本では、近年になってようやく地震発生時には「机の下に身を隠す」との不安の可能性に目を向け、地震発生時の指導内容に変更を見せたところである。

また、ベトナムやカンボジアでは、学校の登下校時における連れ去り事件の可能性の低さについて、何よりの防犯は「親の保護」であるという、当たり前であったはずの方法について示唆を得た。日本では防犯対策や、安全教育が採り入れられようとしたり、アジアでは先進的な取り組みをしているような錯覚に陥るが、「安全な国」であったがゆえの危機管理の立ち後れが実態である。

将来、教職に携わる学生が、海外の学生と危機管理に関する学修を共にすることの価値はここにある。

本研究においては今後、留学生との危機管理に関する学修が、日本人学生に付与する影響について調査を継続し、将来的に教職に就いたときに、教育現場においてどのような影響を及ぼすのか研究を進めていく。そのことによって、今後増えていくであろう海外子女との共存した教育のあり方についても、価値ある示唆が得られるものと考えられる。

#### 参考文献

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf)（2019年1月5日確認）

文部科学省「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/11/1411368.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/11/1411368.htm)（2019年1月19日確認）

OECD編 Lessons in Danger - School Safety and Security - 『学校の安全と危機管理 - 世界の事例と教訓に学ぶ -』立田慶裕 監訳 安藤友紀 訳 2005年 明石書店

小川佳万・服部美奈 編著 『アジアの教員 - 変貌する役割と専門職への挑戦 -』2012年 ジアース教育新社

松井典夫 著 『どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか - 事件・事故・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全』

教育』2017年 ミネルヴァ書房

阿波村透 2012 「留学生交流と大学の危機管理 -3.11大震災における国立大学の対応と今後の課題-」新潟大学  
国際センター紀要 第8号 pp.93-100

加藤朗 1999 「危機管理の概念と類型」日本公共政策学会 年報1999